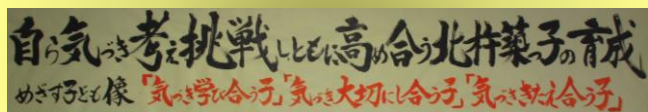


ともに・・・

R8. 10. 6 文責校長



大運動会へ始動開始 ～結団式～

10月17日（土）に秋季大運動会を開催します。それに向け、9月24日（木）に結団式を行いました。

運営委員会が、代表委員会で決定した運動会のスローガン『強気で挑戦し、全力を出し切る大運動会』を、改めて全校の子どもたちに発表し、「練習の時から前向きに挑戦し、全力を出せたと思えるような運動会をつくっていきこう」と、力強く呼びかけました。

式では、運動会を支える4～6年生で構成された“応援係”“放送係”“審判・得点・出発係”のメンバー紹介もありました。

さて、先週の朝、6年生の教室を覗くと、応援係が早速集まっていて、どんな応援歌にするか組ごとに相談しているようで、やる気に満ちた子どもたちの姿があります。

組の子どもたちの心を一つにする応援歌。どのような応援歌ができあがるのか、大変楽しみです。



見ている地域の人が笑顔になるように

～低学年表現練習～

大運動会に向けた練習に、子どもたちは日々励んでいます。

9月28日（月）1時間目、低学年の表現練習の様子を見に行きました。聞くとところによると、低学年は、グループ毎に別々の振付で踊る場面があり、その振付もそれぞれのグループ毎に考えているそうです。この時間は、グループに分かれて、別々の教室で練習をしていたのです。

あるグループが練習している教室を覗いてみました。すると、子どもたちが、これまで考えた振付を確認しながら踊り進めています。

練習途中のきりのよいところで、私は子どもたちに、「どんな踊りにしたいなと思っているの？」と尋ねてみました。すると、「児童会の9・10月のめあて

【運動会を通して、地域の方々に笑顔にし、元気を与えよう】のように、自分たちの踊りを見ている地域の人が笑顔になるように、楽しい踊りにしたい」と答えます。

そこで、私は、「みんなが踊っている様子を動画で撮

影して見てみたら」と声をかけてみました。その教室にいた先生に踊りの様子を撮影してもらい、「地域の人々が笑顔になるように、楽しい踊りになっているかな？」と投げかけ、映像を子どもたちと見てみました。

子どもたちは、自分たちの踊りを真剣な眼差しで見つめ、映像を見終わった後、「みんなの踊りがそろっていない」「踊りを覚えられていない」「笑顔で踊っていない」と発言しています。自分たちが目指そうとする踊りに、まだまだ近づいていないことに気づいたのです。

そこから、後半の練習は、まず“踊りを覚えて、みんなの踊りがばらばらにならないようにする”ことに焦点をあて、練習を続けることにしました。1年生に3年生は「ゆっくりやってみよう」と声をかけ、2年生は左足を前後に動かす振付を、目の前でやって見せながら教えてあげています。1年生は上級生からやさしく教えてもらいながら、振付を一生懸命まねています。

しばらく練習して、もう一度自分たちの踊りを撮影し、見てみることにしました。私が「踊りはそろったかな?」「踊りは覚えられたかな?」と問うと、「前よりもそろった。でもばらばらなところがある」「振付をまだ覚えられていないところがある」と、課題を見つけた子どもたちでした。

次の練習では、その2点を解決しようと練習に励むそうです。

北杵築小の伝統に ～「ありがとう」～

私は、現在高学年の家庭科に授業に行っています。

先日、6年生の裁縫の型紙作りで、一人の子に「ごめんね」と謝ったことがありました。その時、その子から返ってきた言葉は、“ありがとう”でした。私はそのような言葉が返ってくるとは予想しておらず、驚いて、どうして“ありがとう”というのか尋ねました。すると、“ごめんね”と言ってくれたので“ありがとう”と言ったとのこと。このような場面で感謝の気持ちを表すことができるのは、なんとすばらしいことでしょうか。

この“ありがとう”という感謝の言葉。子どもたちを見ていると、前述の子だけでなく、他の6年生もよく口にしています。

先ほどの子に、「昔からこのように“ありがとう”ってよく言っていたの?」と、さらに聞いてみました。

すると、「そうではありません。去年担任だった河野誠先生がプリントを配っていた時に、受け取った私たちが黙って受け取っていました。それで、誠先生が、受け取ったら“ありがとう”と言った方が、お互い気持ちがいいよと話をしてくれて、そこから、みんないろんなことに“ありがとう”と言うようになりました」と教えてくれました。

今は亡き河野誠先生の教えをしっかりと心に刻み、6年生は、ちょっとした出来事でも感謝の気持ちを持ち、“ありがとう”を伝えられる子に育っています。

「このすばらしい姿が北杵築小学校の伝統になっていくよう、みんなの姿を下級生にしっかり見せてください」と6年生全員に伝え、顔を引き締め、うなずく6年生。

またひとつ、子どもたちのすごさを胸に焼きつけました。

